

フランス革命における平原派指導者

——カンボンの場合——

小 林 良 彰

- I はじめに
- II 商工業者としてのカンボン
- III 革命前におけるブルジョアの改革派
- IV 立法議会における無党派の革命家
 - 王権に反対しながらロベスピエール、マラに反対した
 - ジロンド派と協力しながら、それから離れていく
- V デュムーリエ將軍と御用商人にたいする攻撃
 - 政商になったデスパニャック僅正
 - 政商デスパニャックに対するカンボンの闘争と敗退
 - 政商シモンとの闘争
 - 政商に対するカンボンの一時的勝利
- VI ジロンド派との対立と協調
 - カンボンの公安委員会
 - 最高價格制についての意見
 - 累進強制公債の推進者
 - ジロンド派追放に反対した
- VII おわりに

I は じ め に

フランス革命におけるブルジョアジーの政治行動は、ほとんど研究されていない分野である。今ここにカンボンの行動を紹介するが、彼は商工業者でありながら、革命家となり、しかも、有力な党派に組みせず、一人一

党的な立場を貫徹した。

その意味では孤立した革命家であるが、財政上の才能を見込まれて重要な地位についた。孤立、必ずしも無力ではない。フランス革命の研究が、ややもすると、ジロンド派とかモンタニヤールのような、有名な党派の行動を中心としたものになりやすいが、そればかりでは、歴史の本質を見ることは出来ない。カンボン¹⁾を軸としてフランス革命を見ることは、いわば裏返しの歴史であり、それが、平原派 Plaine と呼ばれた国民公会の最大多数を理解するための手がかりになるだろう。

II 商工業者としてのカンボン

ピエール・ジョセフ・カンボン Pière Joseph Cambon は、南フランスのモンペリエ Montpellier 市に 1759年に生れた。六人兄弟の長兄であり、父親は織物の商業をおこない、誠実な商人として知られた。1785年、すなわちフランス革命の直前、事業から隠退したが、このときに 385,000 リーブルの財産をもっていた。財産は六人の子供に平等に分割された。長兄のピエール・ジョセフ・カンボンは、29才で父親の商業を引継いだ。

彼は事業を拡大するため、1785年モンペリエのロシュ Roche という人物を加え、これに二人の弟ジャン Jean とオーギュスト August を加えて500,000リーブルで新会社を組織した。この活動の一環として、弟のオーギュストがヴァンデー地方のショレ Cholet 市に行き、ここで麻と綿のハンカチを作るマニュファクチュアを経営した。フランス革命のさなか、オーギュストはヴァンデー反乱軍に捕えられ、ショレ市におけるカンボン家の財産が反革命軍によって接収され、オーギュストは投獄されて残酷な扱いをうけた。

弟のジャンは、ボルドーで商館を設立し、兄弟で作った工業生産物をサン・ドマング(ドミニカ)へ輸出する仕事をつづけた。

またカンボンは、モンペリエで兄弟の会社を指揮し、その利益の五分の二を手に入れた。彼のいうところによれば、さらに綿紡績と染色の工場を作り、アカネ(茜)の栽培をおこない、一日で4000人を使用したという。これらの事業で、1792年の末

までに、256,156リーブルの利益をうけたという。¹

このようなカンボン一族の商工業は、フランス革命がはじまっても絶えることなくつづき、1796年に放棄されるまで維持された。カンボンが革命家、政治家として活躍しているときでも、ブルジョアジーとしての性格を同時に維持しつづけたことがわかる。

Ⅲ 革命前におけるブルジョア的改革派

さしあたり、フランス革命のはじまる以前は、まだカンボンの舞台は、モンペリエ市を中心としたラングドッグ州にかぎられていた。ここでカンボン親子はブルジョアジーの中の改革派として政治運動をおこなった。

ラングドッグ州の王といわれた人物は、ナルボンヌ大司教 Narbonne ディヨン公爵 Dillon であり、彼は大領主でヴェルサイユ宮殿の有力者であり、ラングドッグにおける王権の代表者であった。このディヨンにたいする反対者として、カンボン親子が頭角をあらわしてきた。ここに、大領主対商工業者の対立を象徴するものがある。²

ただしカンボン親子は、ブルジョアジーの中の工業資本の立場をより強く代表し、また、寄生的な特権商人や、古い徴税組織にたいする反対派であったことも示している。

カンボン親子は、三部会の請願書が全国で出されたときに、モンペリエ市とその管区における綿布とハンカチの工業団体を代表して請願書を起草した。その中で、塩税、国内関税、補助税、通行税その他旧体制にまつわる徴税組織の廃止を要求し、総徴税局の廃止を主張した。³

総徴税局とは、王権が間接税を徴収するときに、一部の特権的商人にそ

1 F. Bornarel, *Cambon et la Révolution française*, Paris, 1905, pp. 1-2.

2 *Ibid.*, p. 3.

3 *Ibid.*, p. 12.

の徴税の権利を与えるものであるから、カンボンの立場は、特権の商人にたいする本来の商工業者の闘いを象徴している。

これは、のちにフランス革命がはじまり、国民議会と立法議会でフィヤン派とジャコバン派が対立するとき、カンボンがジャコバン派の側につき、特権商人のグループが、フィヤン派の側についた事件を、あらかじめ示唆するものである。

モンペリエの綿工業家を代表する意見としては、一連の保護貿易主義にもとづいた政策を主張した。フランスの工業が十分に供給できる商品については、外国商品の輸入を禁止すること、その他の商品についても、保護関税を設定すること、インドから入ってくる綿布その他の商品を輸入禁止にすることなどが保護主義的な要求であった。さらに、王権による検印を廃止し、工業製品の製作者の名前を製品につける義務を課するように主張した。⁴

王権による検印の廃止と、製作者の名前をつける責任については、王権の検印にまつわる重商主義的な産業規制体系を撤廃するようにもとめたものであり、そのうえ、検印を押すことにともなう検査税の徴税に反対したものである。ここにも、また王権対工業資本家の対立が認められる。

しかし、保護貿易を主張することは、もはや王権対ブルジョアジーの対立の段階ではない。むしろ、貿易政策をめぐる、ブルジョアジー内部での論争に発展する性質をもっていて、後年のジロンド派との論争を引きおこすべき性格を暗示している。

というのは、ジロンド派はだいたいにおいて自由貿易論者であり、ジロンド派を追放したあと、保護貿易主義にもとづく航海条令が制定された。その意味で、カンボンは、革命の出発点から、すでにフィヤン派でもなくジロンド派でもない、第三のブルジョアとしての方向を求めていた。これが、のちに、彼がブルジョアではあってもジロンド派の側につかず、平原派にとどまりながら、一時的にモンタニヤール（山岳派）と協調した理由

4 *Ibid.*, p. 11.

である。

革命前におけるカンボンの立場を要約してみよう。彼は、王権すなわち大領主にも対立し、フイヤン派のブルジョアジーにも対立し、ジロンド派系のブルジョアジーにも対立する要素をもちながら、本人もまた地方的ブルジョアの中で指導的役割を演じるほどの、かなり豊かな商工業者であった。このような人物が、フランス革命、とくに恐怖政治で財政の中心に立つようになる。

Ⅳ 立法議会における無党派的革命家

王権に反対しながらロベスピエール、マラに反対した。

カンボンは国民議会の補欠候補になった。パリでバスチーユ占領を見ると、これをモンペリエの父に報告し、父はこれを住民に知らせて歓喜させ、このためカンボンの名が有名になった。⁵

ネッケルが革命のはじめ国民に訴えた愛国税について、カンボン親子は7000リーブルを支払って協力しているが、これはそれほど大きな金額ではない。カンボンの父は、モンペリエの城をバスチーユ占領の例にならって破壊することを煽動した。1790年5月2日、青年の一隊がこれを襲撃して、守備隊を武装解除した。同じようなことは、マルセイユの国民衛兵がおこなった。この二つの事件がパリに聞える⁶と、国民議会と大臣はこれを非難した。

このときのカンボンの父の行動は、すでに国民議会の多数派にも対立し、フランス革命政府の最初の内閣にも対立するものであり、革命をより押し進めようとする方向をもっていた。

カンボンはモンペリエに帰って、ジャコバンクラブの創設に参加した。また、モンペリエにおける平等主義者友の協会 Société des Amis de l'Ég-

5 Ibid., pp. 14-15.

6 Ibid., pp. 23-24.

alité の規約起草委員になった。ここに、後年有名になるカンパセレス Cambacérés やシャプタル Chaptal が入っている⁷。

カンパセレスもカンボンと同じく国民公会の平原派の有力者となり、生残ってナポレオンの第二統領となった。シャプタルもまた恐怖政治の政權に協力しながら、ナポレオンや王政復古のもとでも貴族として優遇された。

1791年10月1日、立法議會に745人の議員が集ったが、すぐにカンボンは財政の知識を認められ、立法議會財政委員会に入った。またパリのジャコバンクラブにも登録した⁸。

カンボンは財政委員としての立場について後年書き残している。それによると、立法議會のほとんど全期間にわたって財政委員のメンバーであったが、支払いを命令したり、おこなったり、おこなわせたりしたことはけっしてなく、つねに国庫を監視していただけたと書いている⁹。まだこの時期は、行政面での権力をにぎっていたのではなくて、監督権にとどまっていたことがわかる。

フランス革命軍が敗北し、パリが騒乱状態になり、8月10日の武装蜂起がさしせまってくると、カンボンの動きは複雑をきわめるようになった。彼は革命家として行動するが、どの党派にもつこうとしない。カンボンは無党派的な革命家の実例とみることができる。

まず、1792年7月24日、「暴君の像を大砲に改鑄してしまうこと」を立法議會で要求し、さわがしい怒声に迎えられた。これはまだ、王權が倒されていないときに、すでに国王の像を武器に転用しようというのであるから、財政問題の解決のためには、王の尊厳を意にかけないという割切った考え方を示すものである¹⁰。

7 Ibid., p. 26.

8 Ibid., p. 46.

9 Stourm, *Les finances de l'Ancien Régime et de la Révolution*, t. 2, Paris, 1885, p. 401.

10 F. Bornarel. *op. cit.*, p. 135.

8月10日の直前、カンボンは議会で演説し、愛国主義の行きすぎが成果をだいなしにして、自由と反対の方向に押しやることになるかと警告した。立法議会は拍手喝采をして、カンボンの提案を採択し、そのあとジョンド派のヴェルニヨーが、憲法に敬意を払うべきであると呼びかける宣言起草することを託された。¹¹

この事件は、群集や義勇兵を煽動して武装蜂起へとすすめようとするマラやロベスピエールの動きにたいして挑戦したものである。こうした動きを抑えようとする方向では、ジョンド派と歩調をともにした。そのため、立法議会の多数の賛成を得ることができた。

それでは、立法議会でまだ指導権をにぎっているフィヤン派に協力するのかといえば、そうではない。8月10日の日、立法議会でデルマ Delma が蜂起委員会を解散させよとの要求をだしたとき、カンボンは発言してこの提案を否決させた。彼によると、現在はずべての分裂が中止されるべきときであり、王制にたいして蜂起した人々と一体になるよう、立法議会をまとめることを主張した。¹²

ジョンド派と協力しながら、それから離れていく。

したがって、カンボンは、王制にも反対しフィヤン派にも反対するという点では、やはり革命家の立場であった。その延長として、宮廷の秘密文書、多くの政治家と宮廷との関係についての文書の公表を要求した。王制にたいする武装蜂起が勝利して、国王一家が投獄され、王権が停止され、国民公会の召集が可決され、フィヤン派が敗北したあと、まだ立法議会は国民公会の召集日まで権力を担当していた。そのとき、カンボンは9月5日に立法議会副議長となり、9月16日に立法議会議長になった。

立法議会が終り、1792年10月20日国民公会が召集されたとき、カンボン

11 Pancouche. *L'Annien Moniteur réimpression*, Paris, 1858-1863, t. XIII, pp. 328-333.

12 *Ibid.*, t. XIII, p. 428.

は国民公会議員となった。そのとき、ジロンド派のロラン Roland, ビューゾー Buzot, ラスルス Lassource などと組んで、パリ・コミューンやそれを擁護するロベスピエール、マラと対立した。

ところが、10月30日以後ジロンド派からはなれ、ジロンド派のバルバルー Barbaraux がパリ・コミューンを処罰するための法案を要求したとき、その延期を求めた。11月24日をすぎると、カンボンがマラやパリ・コミューンにたいする攻撃をさしひかえるようになった。それとともに、カンボンのジロンド派にたいする批判、また、ジロンド派とむすぶデュムーリエ¹³ 將軍 Dumouriez にたいする攻撃が鮮明になっていった。

ここまでの行動を表面的にみると、カンボンがなにをしているのかわからないようにみえる。彼はジャコバンクラブに登録しているが、ロベスピエールやマラとも対立し、武装蜂起を指導したパリ・コミューンを抑圧する側にまわり、ジロンド派と手を組んでいるが、10月を境に急速にジロンド派からはなれた。王制の打倒とフイアン派にたいする反対という点だけでは、一貫した原則は保たれているが、そのあとは、ジロンド派でもなく山岳派でもない第三の立場に立っている。

この態度が、国民公会における最大多数派の平原派と一致する。フランス革命の恐怖政治の時期を、ジロンド派對山岳派の対立と単純にみることは誤りであり、両者の間に、無党派の革命家の集団として平原派のあったことを、私はかねてから強調してきた。

この平原派は、一人一人が、独立心の強い革命家であったために、集団としてははなばなしく動かないが、投票のときは、最大多数であったために威力を示した。平原派ははじめジロンド派を支持し、やがてジロンド派からはなれて山岳派を支持するようになる。ただし、支持するからといって、一体になってしまったわけではない。平原派は、最終的には、山岳派

13 F. Bornarel, *op. cit.*, pp. 161 et 172-3.

すらも肅清してしまう。

そうした勢力の中の一人で、しかも、平原派の最左翼として山岳派に接近した人物として、カンボンのような、一見あいまいにみえる革命家があった。ただし、あいまいにみえるようであるが、彼の思想があいまいなのではなくて、彼は彼なりの一貫した立場に立って動いていたことが、つぎの事件の展開をみるとあきらかになる。

V デュムーリエ將軍と御用商人にたいする攻撃

政商になったデスパニャック僧正

国民公会で、ジロンド派とモンタニヤール（山岳派）の対立が激化しはじめているとき、カンボンは平原派にあって、モンタニヤールとくにマラ、ロベスピエールを非難していた。それにもかかわらず、しだいに攻撃のほこ先をかえて、ジロンド派に対立しはじめた。その基本的な理由は、デュムーリエ將軍と結ぶ御用商人 *fournisseurs aux armées* との対立にあった。その意味を知るためには、当時、デュムーリエ將軍がどのような名声と権力を持ち、また、御用商人がどのような経済力をもっていたかを知らなければならない。

オーストリア、プロイセンとの戦いでフランス革命軍が敗北し、パリが陥落するかもしれないという恐怖の中で、8月10日の武装蜂起がおこされ、フイヤン派が倒された。そのあと、ヴァルミーの戦いでプロイセンの軍隊が敗北し、ドイツ領に後退した。

他方で、北方のベルギーにオーストリアの大軍が集結し、これがフランスをうかがっていた。デュムーリエ將軍は、フランスの正規軍と義勇兵を率いてベルギー領内に入り、オーストリアの大軍と対決し、ジュマップの戦いでこれを撃破した。そのあと、オーストリア軍をベルギー領内から追

放し、さらにオランダに進入した。

デュムーリエ將軍は、この時点における常勝將軍として、最大の軍事的名声を拍した。デュムーリエ將軍は当時の最強の將軍であったため、国民公会の議員も彼を頼りにし、かつ恐れた。とくに、ジロンド派議員と、平原派のダントン、モンタニャールのジュリアン（ツールーズ出身）など、幅広い有力議員が彼を支持していた。

デスパニャック d'Espagnac は貴族で 副司教でありながら、早くから株式投機に活躍し、巨大な財産を蓄えていた。彼は帯剣貴族の家に生まれ、高級僧侶となり、財務総監カロヌ Calonne を取りまいて汚職事件をひきおこした政商の大ブルジョアという三つの性格を兼ねそなえた人物であった。三部会選挙では、シエイース Sièyes に敗れた。バスチーユ占領のときには武器をもって参加し、ジャコバンクラブに加入してその書記になった。ここで、彼は革命家としてダントン、カーミュ・デムーラン Camille Desmoulins エロー・ド・セシエル Éreault de Sechelles など有名な革命家と親交をむすんだ。

戦争がはじまると、軍隊の御用商人となって小銃、軍馬その他の軍需品を供給する仕事を引きうけた。とくに、8月10日の事件でフイヤン派が倒されジロンド派の内閣ができたときに、大蔵大臣クラヴィエール Clavière に生命保険社株を担保に提供して、巨額の軍需注文を引きうけた。彼は法務大臣ダントン、陸軍大臣セルヴァン Servan に便宜を計ってもらい、デュムーリエ將軍の軍隊にたいして軍需品を供給したが、このときに非常に有利な条件で契約を結び、他の御用商人の二倍から三倍の支払をうけた。

財政委員のドルニエ Dornier がそうした腐敗、汚職を指摘した。デスパニャックが1か月1,502,050リーヴルの支払をしているにもかかわらず、国庫からは5,443,504リーヴルをうけとり、しかも自分の支払は価値の下りかかったアシニアで行い、国庫からは正貨（金属貨幣）で支払をうけていたことをあばいた。

このようにして、最強の將軍デュムーリエ、与党のジロンド派内閣、それにダントンの絡む勢力と、最大の御用商人となったデスパニャックの黒い取引、国庫略奪が国民公会で問題になりはじめた。

政商デスパニャックに対するカンボンの闘争と敗退

しかし、さしあたり相手は強大な力をもつ将軍と、最大級の財産家で政財界に幅広い根をはっている政商であり、彼らが政府の保護のもとにあったから、これに勝つことは容易ではなかった。この闘いの渦中にカンボンが登場してくる。カンボンは、このとき国家財政をデュムーリエ将軍やデスパニャックから守る闘士としての役割をはたした。

このとき、カンボンの下にいて財政を担当し、のちに成功してナポレオン時代にガエテ公爵 Gaëté になったゴードン Goudin は、その時点でのカンボンの役割についてつぎのように述懐している。

「勝利に輝く将軍を怒らせることの危険は非常に大きかったので、もしわれわれが国民公会の財政委員会を指導しているカンボンのまれな勇気と愛国心によって支えられなければ、この闘いの中で、もろくも押しつぶされてしまっただろう。私は、何回も彼に生命を助けられた。そしてカンボンは、彼の断固とした性格で、最強のクラブであるジャコバンクラブからの絶えまない攻撃にさらされている国庫を守りぬいた」¹⁵

カンボンは、デュムーリエ将軍とデスパニャックを11月22日正面から攻撃した。

「公金の取扱は、このデスパニャック僭正にもまかせることはできないし、一人の将軍に対してもまかせることはできない。一人の将軍が軍功をあげればあげるほど、財政の取扱を彼にまかせず、厳格な規則に彼を服従させることが重要である」。

こうして、デュムーリエ将軍とデスパニャックから、財政資金の取扱を取り上げようとした。もちろんカンボンだけではなく、何人かの国民公会議員も口をそろえて御用商人の暴利を告発した。党派からいえば、モンタニヤールの議員もあり、平原派の議員もあった。一連の御用商人が、国家財政に損害を与え、暴利をむさぼり、浪費、汚職、公金着服をおこなっ

14 A. Mathiez, *Corruption parlementaire sous la Terreur*, Paris, 1927, pp. 149-154.

15 F. Bornarel, *op. cit.*, Introduction, p. 3.

ているという非難であった。同じ日、カンボンが再び批難を加えた。その圧力により、国民公会は、デスパニャックとデュムーリエ將軍の支払命令委員マリユ Malius とプティジャン Petytjean の三人を逮捕することに決定した。

しかし、デュムーリエ將軍はこの決定に対して反撃し、ベルギーにおける軍隊の費用が急を要しているといつて、デスパニャックと国庫との契約を早急に実行するよう要求した。このときは、デュムーリエ將軍の戦勝につぐ戦勝の時期であったためか、カンボンをはじめとする反対派は、決定的な勝利をおさめることができなかった。

デスパニャックは、国民公会で尋問されるとこれにたいして反論し、逮捕の身の上になっているにもかかわらず、ジャコバンクラブに出頭して論争するほどの大胆さを示した。平原派も分裂し、平原派議員のルコワントル Lecointre は軍事委員会の名で、マリユの放免と任務継続を要求し、カンボンと対立した。

結局、国民公会は、デュムーリエとデスパニャックのおこなった契約について、政府資金を支払うという決議をした。このときは、カンボンのデュムーリエ將軍に対する闘いが、カンボンの譲歩、後退におわつた。¹⁶

政商シモンとの闘争

カンボンは、デュムーリエ將軍を取りまくもう一人の御用商人ミシエル・ジャン・シモン Michiel Jean Sinons との闘いをはじめた。

シモンはブリュッセルの馬具商人、馬車製造人の家に生れた。ベルギー人であるが、フランスに移ってダンケルクで海上貿易の商館を開き、植民地物産を買付ける仕事で成功して、ダンケルクの有力商人になった。1791年9月ダンケルクを去ってパリに入り、有力銀行家のグルフユール Grefuhle にたいして資本を提供し、共同事業者となった。¹⁷

16 A. Mathiez, *Ibid.*, pp. 155-164.

17 J. Bouchary. *Les manieurs d'argents à Paris à la fin du XVIII^e siècle*, t. I, Paris, 1939, pp. 173-174.

つまり、シモンはベルギー系の商人、銀行家であった。すでにこのころ、彼は約80万リーブルの財産をもっているといわれたから、大ブルジョアの一人に分類できる。戦争が始まるとともに、軍需注文を請負い、デュムリーエ將軍の支払命令委員マリユと契約をむすんで、食料、馬糧を供給する契約をむすんだ。

しかし、シモン兄弟とデュムリーエ將軍の契約にもまた、不正取引があった。そのうえシモンは、馬糧を前線に送る契約をしておきながら、馬車がないことを理由に馬糧を送らず、このため、フランスの騎兵が多く壊滅したという事件がおこった。¹⁸

カンボンは、新しく陸軍大臣になったパーシュ Pache と協力して、シモンとデュムリーエの契約を破棄した。しかし、デュムリーエ將軍はシモンから莫大な金を借りていたこともあって、国民公会にたいして自分が辞職すると脅迫した。その脅迫に屈して、国民公会は12月13日デュムリーエ將軍とシモンの契約を緊急に必要なものと認めて、国庫の支出を承認した。

この事件を調査するために、ダントンを中心とした国民公会議員が派遣された。デュムリーエ將軍は、ダントンに自分は無実であり自分を中傷している者がフランスを危機に陥れていると訴えた。ダントンは、あいまいな報告をして、デュムリーエ將軍をかばった。カンボン対デュムリーエの争いは、翌年の1793年に入っても続き、1793年1月デュムリーエはついに軍隊を離れてパリにきて、シモン、デスパニャックとのスキャンダルを消すために、カンボン、パーシュと闘った。一時はカンボンを懐柔しようと試みたが、これも成功しなかった。¹⁹

こうした対立ののち、デュムリーエ將軍はベルギー戦線でオーストリア

18 A. Mathiez, *Autour de Danton*, Paris, 1926, pp. 174-176.

19 *Ibid.*, pp. 176-178.

軍に敗北し、そのあとフランス政府に反逆して、敵国軍の中に逃げこんだ。いわゆるデュムーリエの反逆がおこなわれた。この事件で、彼を支持していたジロンド派の威信が大きく傷つき、かわって、彼に徹底的に対立していたカンボンの名声が高まった。

ただし、デュムーリエ將軍を取りまく御用商人の力を打倒することは、まだできなかった。デスパニャックやシモンは、平原派やモンタニヤールの議員の中に多くの有力な支持者をもっていた。とくに、8月10日の英雄ダントンが強力な保護者になっており、そのため、カンボンの御用商人にたいする闘いは続いた。

カンボンの協力者はドルニエであった。ドルニエは有力な鉄工所の持主で、国民公会の平原派議員となった。デスパニャックの事件を審査するため、公安委員会、財政委員会、軍需委員会、輸送委員会の四委員会が合同した調査委員会の委員となり、その代表として、報告書を作成した。

ドルニエとカンボンは、デスパニャックとの契約をすべて破棄すべきだという報告書を作ったが、まだ公安委員会で影響力をもっていたダントンと、当時有力議員であったジュリアン（ツールーズ出身）がデスパニャックを弁護したため、成功しなかった。

政商に対するカンボンの一時的勝利

結局、7月10日公安委員会が改選されてダントンとその友人が落選すると、その直後、7月20日、ドルニエが調査報告書を国民公会に提出することに成功した。これによって、デスパニャックの不正取引、国家資金の横領が実証された。7月25日、カンボンの提案により、国民公会はデスパニャックとの契約と、それに類似するすべての契約を破棄することを決定した。²⁰

こうしたカンボンの闘いは、同じブルジョアジーの中に属する者の内部

20 A. Mathiez, *Corruption...*, pp. 173-178.

抗争であった。彼は中流のブルジョアとして、より上層のブルジョアであるデスパニャックやシモンの不正取引を告発し、これをつぶすために奮闘した。そして、カンボンの側には、同じ程度のブルジョアとしての、鉄工所の経営者ドルニエがみられる。中流のブルジョアジーが、上層のブルジョアジーにたいして批判攻撃を加えたものとみることができる。そして、この時点におけるブルジョアジーの最大の者が、デスパニャックのような、御用商人となった政商であった。

カンボンの政商にたいする闘いは、たしかに勝利に終わった。ただし、この勝利が永久のものであるかどうかは別問題である。長い目でみると、完全な勝利ではない。デスパニャックは恐怖政治のときに捕えられて処刑されるが、その処刑も偶然の要素が多い。つまり、一度逃亡に成功しながら、金に執着して舞い戻り、そこを逮捕されたからである。シモンは外国に逃亡して生きのび、政情が安定すると、フランスに帰り、また巨大な御用商人となった。しかも、革命の時期に国有財産を大規模に買込み、大土地所有者に生れかわっている。

だから、カンボンの御用商人にたいする勝利は、恐怖政治にむかうフランス革命の中での一時的な勝利であった。この時期、カンボンの闘争力は、主として自分より上層の者の不正な行動にむけられ、彼らの略奪から国家財政を守ることに使われた。カンボン、ドルニエともにブルジョアではあるが清廉潔白の評価が高く、ブルジョアジーの中での正義派とともいえる。こうした人物が、不正な大ブルジョアの行動に立ち向かったのである。

Ⅶ ジロンド派との対立と協調

カンボンの公安委員会

デュムーリエ將軍は1793年3月18日 ネールウィンデン Neervindin で

オーストリア軍と戦い、大敗北をうけた。敗北の最大の原因は、彼を取りまく御用商人の不正にあった。軍需物資が満足に供給されず、軍隊の装備が悪くなり、義勇兵が不満をもって勝手に帰国してしまった。そのために、兵員が減少し、残った兵士の士気が低下したからである。そこで、デュムーリエの責任を追求する声が一段と高まった。

彼は、オーストリア軍と休戦して、軍隊をパリに入れ、クーデターをおこなって王政を回復しようという計画をたてた。この計画が露見して、4月4日、彼はオーストリア軍の陣営に逃亡した。デュムーリエの反逆は、国民公会にたいして大きなショックをあたえた。

デュムーリエの共犯者が幅広くかくれて存在していると思われた。ダントンも疑いをかけられたが、ダントンは、ジロンド派幹部こそがデュムーリエとの共犯者だと断言して、責任をかわした。

4月10日、ロベスピエールは国民公会での演説で、デュムーリエと共謀したジロンド派幹部、すなわちブリッソ Brissot, ガデ Guadet, ヴェルニョー Vergniaud, ジャンソネ Gensonné, ペチヨン Pétion らを批判し、²¹ 彼らの支配が祖国を危くしていると攻撃した。

このように、ロベスピエールがジロンド派にたいする対決の姿勢を強めていたとき、カンボンもまた、ジロンド派との対立を深めていった。ただし、その方法が、ロベスピエールやモンタニヤールとはちがっている。強いていえば、今日の言葉で、是々非々主義とでもいえるものがあった。そこに、モンタニヤールと平原派との相違点がみいだされる。

1793年2月21日、ジロンド派のルベッキー Rehecquy は国民公会でカンボンに非難した。それは、カンボンが、ヴァール県当局が穀物を買入れるために公金に手をつけたことを批判したためであった。またカンボンは、ボルドー市とマルセイユ市が現金（アシアではなくて金属貨幣）を要求したときに、これに反対した。ジロンド派は、この要求を支持して対立した。²²

²¹ *Moniteur*, t. XVI, pp. 105-112.

²² F. Bornarel, *op. cit.*, p. 243.

こうしたさまざまな経済政策で、カンボンは、彼なりにジョロンド派と闘った。国王の処刑についての投票では、処刑には反対した。そのかぎり、ジョロンド派と同じ立場である。しかし、国王の生命を救う手段として提案された人民投票については反対したから、この点では、ジョロンド派と足並みをそろえていない。もちろん、この問題については、ジョロンド派の中の足並みもそろっていなかったのではあるが。

また、革命裁判の設置には反対した。ところが公安委員会の創設には貢献し、公安委員に選出されていた。3月25日、公安委員会の改選がおこなわれたとき、カンボンは選出されず、ジョロンド派が多数入った。デュムーリエ將軍の敗北と反逆で危機感が高まると、公安委員会へ権力を集中する動きが高まった。カンボンは、ダントンや同じ平原派の雄弁家バレールとともに、公安委員会への権力集中に努力した。しかし、これに対しても、ジョロンド派のビュゾ Buzot, ビロットー Birroteau, ヴァラゼ Valazet などが抵抗した。デュムーリエ將軍の反逆の直後、4月6日に改選された公安委員会には、ダントン、ドラクロワ Delacroix とともにバレール Barère、²³カンボンが選出されている。

この新しく改組された公安委員会に内閣（臨時行政会議）が従属し、公安委員会の指導をうけ、業務のすべてを報告しなければならなくなった。そこで公安委員会の独裁といわれる状態が成立したが、この公安委員会は、まだ山岳派（モンタニヤール）のものではなくて、平原派の支配するところであり、ここに、カンボンも平原派の有力議員として選ばれたのである。

最高価格制についての意見

これ以後、6月2日のジョロンド派追放までの2カ月は、外からは敗戦の連続とパリの軍事的占領の脅威をうけ、内にあっては、食料不足、物価騰

23 Ibid., pp. 248-251.

貴による 貧民の不穏な動きをかかえ、この難局をいかにして乗りきるかが、国民公会の課題になった。このとき、もっとも重要な課題は、最高価格制と強制徴兵、これに累進強制公債を加えた3つの政策であった。これらの非常手段をとらなければ、当時のフランスは、外国軍にたいして勝つことができなかった。これらの政策についてのカンボンの態度をみなければならぬ。

これまでの軍隊は、旧体制から引きついだ軍隊と、新しく募集した義勇兵で組織されていた。しかし、それだけの軍隊では、もはや敵に勝つことができなかった。このとき徴兵制が問題になった。カンボンは、自分の出身地モンペリエ市の市民の集会が、徴兵制と累進強制公債の二つを革命的手段として決議したことを知り、徴兵制のアイデアを、この地方出身の選挙人から借りた。ところが、徴兵制については、²⁴ ジロンド派は反対であり、これを妨害するため努力した。

そこで、徴兵制については、山岳派とカンボンの連合が、ジロンド派に対立することになる。

最高価格制については、カンボンは沈黙をまもっていた。あとになって、彼はこれに反対であったといっている。しかし、当時、公安委員会はパリ市民を大切にしてい²⁵て、徴兵制度の実現を急がなければならないので、最高価格制への反対をさしひかえたという。

カンボンは、最高価格制に反対ではあるが、心ならずも、黙っていて、それを通過させた。それと対象的に、ジロンド派は、とくにバルバールを立て、この政策にたいして激烈に反対した。そこで、対立は、やはり山岳派とカンボンの連合の間にあったようにみえる。

ただし、この事件がジロンド派 追放の 決定的な 要因であったかという
と、そうではない。なぜなら、もともと最高価格制が提案されたときに、
モンタニヤール はもちろんのこと、その中のマラや ロベスピエール です

24 *Ibid.*, pp. 256 et 258.

25 *Ibid.*, pp. 259-260.

ら、最高価格制には反対したのである。敗戦が重なり、危機が深刻化してどうにもならなくなったところから、最高価格制を非常手段と理解して、これをすすめようとしたのが山岳派の態度であった。したがって、山岳派の議員もまた、積極的にこの政策をすすめたわけではなく、情勢に動かされ、情勢の必要をさとして受入れたのにすぎない。その点ではカンボンと同じである。

そして最後に、ジロンド派もまた、この政策が決議されたときに、やむをえずうけいれると言明した。この問題は、ジロンド派の譲歩で一応けりのついたことになっている。²⁶

最高価格制についてのカンボンの態度は、必しも一面的なものではない。彼がのちに、これに対して賛成でないといったとしても、別なところで、最高価格制は正しい側面をもっていたと表明したからである。彼は、

「最高価格制は、貪欲な投機業者にたいしては正しい作用をおこなった」
と言明した。²⁷

累進強制公債の推進者

累進強制公債については、カンボンは積極的な推進者であった。これは、収入に応じて累進的に課せられる強制的な公債であり、しかも、公債証書を発行せずに、ただ国家の公債台帳に記入されるだけのものだったから、富者にとってはきびしい内容のものであった。カンボンは、この政策が、富者の財産を尊重しながら一時的に彼らから金を借り、富者を革命にむずびつけ、祖国が救われたときには、借りたものを返すという制度であり、アシアの下落による物価騰貴と混乱を救うには、これ以上の政策はないと主張した。

この政策は、山岳派の積極的な協力を得た。とくに、マラが強力な賛成

26 小林良彰『フランス革命の経済構造』千倉書房、昭和47年、333-337頁。

27 *Moniteur*, t. XVIII, p. 566.

演説をおこなった。ところが、ジロンド派は、ランジュイネ Lanjuinais とバルブルーを立ててはげしく反対した。その対決の結果、5月20日、国民公会は富者にたいする10億リーブルの累進強制公債を可決した。²⁸

ジロンド派追放に反対した

このように、一連の非常手段をめぐって、カンボンとモンタニヤールと提携し、ジロンド派を押しきった。そのかぎり、カンボンは平原派にありながら、モンタニヤールと共同歩調をとっていたことになる。

しかし、つきにくるジロンド派追放については、また別な態度をとった。ジロンド派は、累進強制公債で敗北すると、決定的な対決を準備した。ジロンド派は、もっとも戦闘で左翼的なエベールと過激派のヴァルレに狙いをつけて、彼らが国民公会を転覆するための陰謀をくわだてているといった。それを調査するための十二人委員会の設立を要求し、可決されると、この委員会をジロンド派で固めた。十二人委員会は、まずエベールを逮捕した。エベールを擁護する側は、十二人委員会の廃止を要求した。

すでに、ロベスピエールは、このときジャコバンクラブで武装蜂起を呼びかけた。こうして、ジロンド派とモンタニヤールの激突がはじまった。平原派の議員はその間を動揺し、5月27日、国民公会で十二人委員会が廃止され、エベールの釈放を可決したかと思うと、その翌日、また十二人委員会が、ジロンド派の要求で復活された。²⁹

この決定的な時点におけるカンボンの行動は、まさに平原派の名に価する中立的なものであった。彼は、ジロンド派とモンタニヤールを和解させようと努力したが失敗した。6月1日、パリの諸区の代表がジロンド派議員逮捕の要求を国民公会に請願したとき、カンボンとバレーが請願者に答えた。カンボンはいった。

「二つの党派を動かしているのは自尊心のみである。それを犠牲にするならば、

28 *Ibid.*, t. XVI, p. 430-432.

29 拙著前掲書, 342頁。

祖国はもっと早く安泰になるだろう。もし意見をのべたために、議員の首を落すことになれば、われわれはもはやしゃべろうとしなくなる。³⁰

カンボンは、ジロンド派の十二人委員会を支持していた。6月2日、国民衛兵司令官アンリオー Hanriot が群集を指揮して国民公会を包囲し、国民公会にジロンド派議員の逮捕を強要した。このとき、カンボンはパレルととともにアンリオーにたいして激しい怒りを表明した。また、国民公会を包囲した群集の中に、何人かの陸軍省の役人がいたというので、カンボンは陸軍大臣ブーショット Bouchotte にたいして激しい詰問をおこなった。

カンボンはその翌日、6月3日、公安委員会から引退したいと申し出た。しかし、彼の支持者の請願にさまたげられて留任した。カンボンの公安委員会は、6月13日まで、ジロンド派を国民公会によびもどす希望をもちつづけたが、ジロンド派の反乱（連邦主義者の反乱）がおこり、また、ヴァンデー反革命軍に革命軍が敗北するという重大事件がおこったため、ジロンド派との協調は不可能になった。

このようなジロンド派にたいする同情的な態度にもかかわらず、カンボンを含めた公安委員会は、6月10日に再選された。そのうえ、カンボンとデルマは、ロベスピエール派のサン・ジュストとともに、一つの小委員会を作ることを委託された。これは、反革命軍と戦っている軍隊を、あらゆる作戦と必要手段で結びつけるため、連結の方法を確立することを委託された委員会であつた。³¹

このように、カンボンは、一方でジロンド派を引きとめようとし、ジロンド派追放を強行したモンタニヤールやパリ・コミューンの勢力にたいして露骨な反感を示した。しかし、他方で、この時期の革命戦争を成功させるために、モンタニヤールの議員と協力しながらやっていこうとしている。これが、平原派議員の象徴的な態度であった。

30 F. Bornarel, *op. cit.*, pp. 282-283.

31 *Ibid.*, pp. 283-284.

VII お わ り に

今までのフランス革命史では、ジロンド派と山岳派（モンタニヤール）の対立を極端に描きすぎて、その中間にあった平原派を無視するか、あるいはきわめて主体性のない集団と評価して、無視するに足りるもののように扱ってきた。しかし、カンボンの行動を見ると、彼は彼なりの原則性を貫き、信念をもってことに当たっていることが分る。彼は中流のブルジョアジーを代表する革命家として、巨大な御用商人と闘い、ジロンド派の抵抗を押し切って一連の非常手段をすすめた。しかし、山岳派の主張するジロンド派追放には反対した。

その後、ジロンド派をかばったにもかかわらず、彼はやはり権力の中核に残っている。国民公会は、ジロンド派か山岳派かの二者択一を要求されるような舞台ではなく、ジロンド派をかばい、山岳派に批判的な意見を持ちながら、革命政権の一翼を構成していた議員もいたのである。カンボンは、そうした者の代表的な存在であり、平原派の中の山岳派寄りと位置づけることができる。山岳派も、こうした勢力と協力して権力に喰い込んできたのであり、ジロンド派を追放したあと、自動的に山岳派が権力を独占したというものではなかった。また、国民公会を包囲した群衆、すなわち、サンキュロットに権力が移ったわけでもなかった。さしあたり、まだ、カンボンの公安委員会が健在であり、彼は群衆の行動に強い反感を示したからである。

これから見ても、ジロンド派追放をもって山岳派独裁、ジャコバン独裁、サンキュロット独裁と規定することは間違いであることが分るだろう。